

tomorrow

【特集】

アメリカの思い出 ニューイングランド地方

town navigation
クルマで行く旅

商都、大阪。

tomorrow interview

ヴィヴィアン・チョウ



アメリカの思い出。

ニューイングランド地方

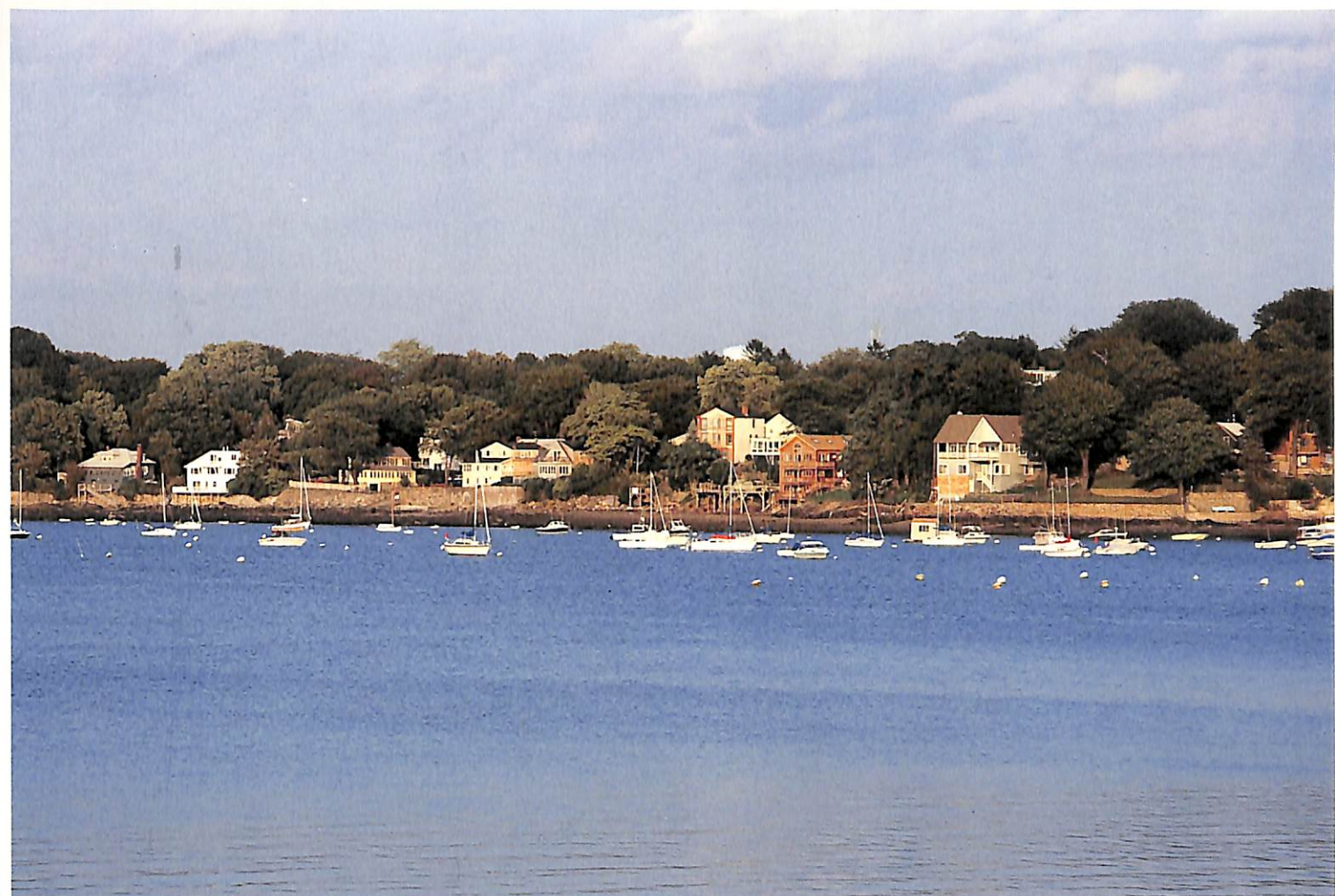
アメリカ合衆国、ニューイングランド地方。

この地方はヨーロッパからの移民が定住をした最初の地。

今のアメリカの歴史はここから始まった。

さあ、懐かしい風景を、古き良きアメリカを探しに出かけよう。

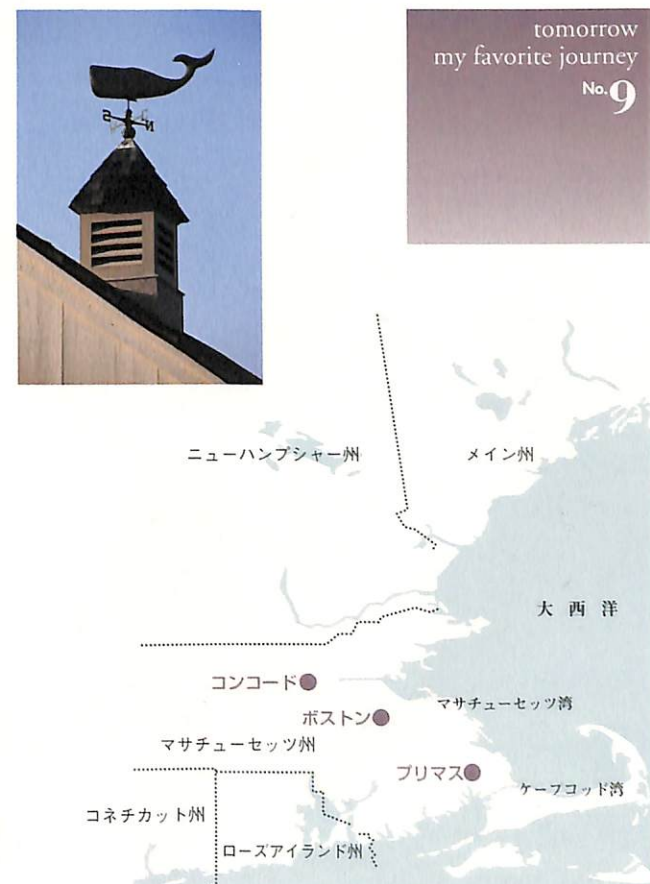
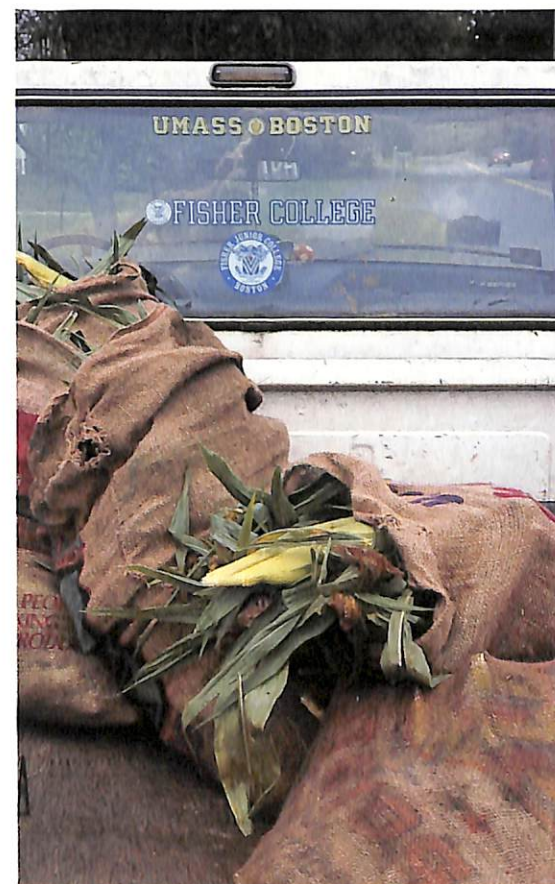




ニューイングランド地方はアメリカ東北部にある6つの州、マサチューセッツ、コネチカット、ロードアイランド、メイン、ニューハンプシャー、バーモントのことをさしている。ニューイングランドという名前からもわかるように、もともとこの地方は、多くはイギリスからアメリカ大陸に移民として定住するようになった最初の場所。つまり現在のアメリカの歴史はここから始まった、ということになる。今はヨットやボートなどが楽しめる、アメリカでもちよつとしたリゾート地として人気が高いのだそう。

せる落ち着いた町並みなど、ここには大都会にはないものがある。ボストンから車で1時間も走れば、緑地に囲まれた高級住宅地や、海岸沿いに面した町に出る。荒涼とした大地がどこまでも続く乾いたアメリカでもなく、近代の象徴、コンクリートジャングルのアメリカでもない、幼いころに読んだ物語に出てきた憧れのアメリカ。木立の中に建つかわいい家で暮らし、週末には海に家族や犬と遊びに行くような、そんなアメリカの風景。ニューイングランドには、まだそんな風景が残っているだろうか。さあ、どこかつかの間の気分になる、古き良きアメリカを探しに出かけよう。

ニューイングランド地方、ボストンからはじめる旅



ヨーロッパから 船に乗って来た人たちが 着いた場所、プリマス



ボストンから車で1時間ほど海岸沿いのフリーウェイを南に下ると、プリマスという小さな町に着く。
プリマスは海に面した小さな町だ。すこし灰色がかった静かな北の海が似合う、豊かな緑に囲まれた町。
町の人が車で海にやって来る。車を止めて、ぼんやりと海を眺めている。本を読んでいる人もいる。配達途中に郵便局の人が休憩をしている姿もみえる。本当に静かで落ち着いた場所だ。
しかし、この町はアメリカの歴史を語るには欠かせない。
プリマスは1620年、清教徒たちがメイフラワーII号に乗って最初に定住した場所、「アメリカ発祥の地」である。

もちろん、彼らが着いたときに先住民であるインディアンたちはプリマスにもいた。清教徒たちがプリマスに到着したのは12月。冬になると雪の降る厳しい土地での生活の知恵をインディアンたちは彼らに教えてあげるなど、定住するための手助けをした。そのかいあって清教徒たちは次々とアメリカの地を踏むようになっていったのだ。

うだ。
その当時に再現したプリマス・プランテーションというテーマパークが、ここプリマスにはある。当時の服装をした男女が当時の言葉を話し、当時の生活を再現している。ここには清教徒たちの生活と、彼らの定住を手伝ったインディアンの暮らしも再現されている。入り口から深い緑の中を歩いていくと、外界とは完全に隔離された小さな村が見えてくる。
ここはテーマパークという呼びかたはあまり似合わない。というのはこのプランテーションは、華やかという言葉からはほど遠いのだ。冬になると雪のたくさん降るこの土地での人々の生活は、決して贅沢なものではなかったからだろう。
当時の家々の間からニューイングランドの海が見える。その海を眺めているうちに不思議な気分になった。この海を彼らはどんな気持ちで渡ってきたのだろうか。大地が見えたとき、どんな気分になったのだろうか。そして大地を踏んだとき、最初に思ったことはなんだったのだろうか。





を遊ぶ。ここはコンコード川周辺に広がる3000エーカーにも及ぶ湿地草原。インディアンたちが住んでいたころからこの草原は広がっていた。彼らはこのあたりを彼らの言葉で「草原の宝庫」を意味する「Musketahquid」と呼んでいたのだそうだ。

この3000エーカーにも及ぶ広大な地には、四季を通じて200種以上の鳥がやって来る。

使い慣れた双眼鏡を持った人たちに会おう。双眼鏡をのぞいて鳥を見つけたり子供に、母親はやさしく鳥の名を教える。グループで来た老人たちは、ただ黙々と双眼鏡をのぞいて鳥の姿を追う。静かだ。この場所で聞こえるのは風が草の間を抜けていく音。鳥のさえずり。鳥の羽ばたき。他にはなにも聞こえない。

どこまでも広がる草原と、どこまでも続く空。ここには珍しいものがあるわけではない。インディアンたちの時代から今に続く自然があるだけだ。なのにここで草原を眺めていると、毎日の生活で忘れていたものを感じ出す。たとえば、風には匂いがあること。たとえば、鳥がこんなにも優雅に舞うこと。こんな草原があることを、コンコードの人たちは当たり前のように思っているのだろうか。ここには都会での生活では得ることのできないものすべてが存在する。風景を眺めているだけでこんなに充実した気分を味わえるのは、本当に久しぶりのことだった。

次に訪れたときも、きっと変わらぬ風景が私を迎えてくれるだろう。そして私はまた同じことを思い、何度も振り返りながらこの場所をあとにするに違いない。

木立の中に潜む家々。 永遠の草原と暮らす町、 コンコード

深い緑に囲まれているコンコード。ここはボストンから40分ほど内陸に入ったところにある。『若草物語』の舞台ともなったこの町は、今でも駅から少し歩けば鳥の声が聞こえ、アーリーアメリカン調の美しい家が木々の間から見え隠れする。

町から少し離れた野鳥保護地区 (Great Meadow Wildlife Refuge) に足



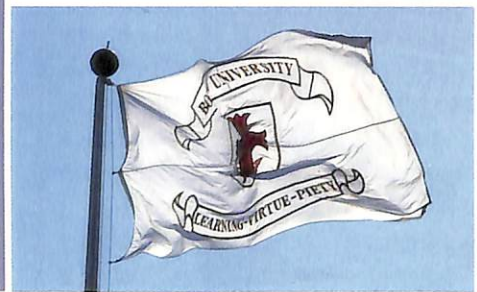
tomorrow
my favorite journey
No. 9





ボストン大学 Boston University

ボストン市のチャールズ川沿いにあるボストン大学。町の中に他の建物と一緒に並んであるこの大学。日本と違って特に囲いがなくて、どこまでが大学なのかがよくわからない。けれどそこがまた良い。キャンパスも特にシンボリックなものがあるわけではないが、歩いていると学生がベンチで楽しそうに話している姿にあえる。町になじんでいて、ハーバード大学などと違ってのんびりした感じ。



LIFE DESK SERVICE INFORMATION

■LIFE DESK ニューヨーク
TEL: 1-800-366-5430 (トールフリー)

電話受付時間 24時間

また、ニューヨークにはレセプションカウンターもごさいます。(土・日・祝日休、営業時間: 9:00~17:00)
ニューヨークにお立ち寄りの際は、ぜひライフデスクをご利用ください。

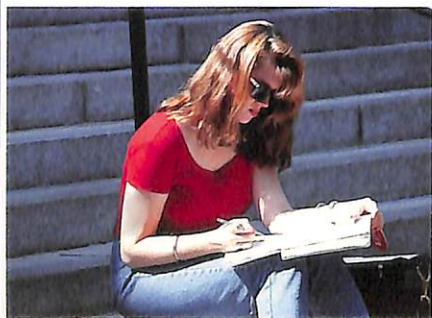
マサチューセッツ工科大学 Massachusetts Institute of Technology

ケンブリッジ市にあるもうひとつの顔。通称MIT。コンピューター、エレクトロニクスなどの最新技術を中心に学ぶ工学系の大学。建物はハーバード大学に比べて近代的な感じ。キャンパスの中には講義を受ける教室のほかに工学の最先端を紹介する博物館やギャラリーなど、楽しめるものもたくさん。また、この大学のコープ(生協)には他の大学とはちょっと違ったおかしなものがあるので、おすすめです。



ノースイースタン大学 Northeastern University

ボストンYMCAの近くにあるこの大学。小さいながらもこの大学は有名。というのはこの大学はアイスホッケーなどのスポーツが強い。アメリカでは「カレッジ」と呼ばれる大学リーグがあらゆるスポーツにあり、日本では想像がつかないほど国民の関心が高い。大学はコンパクト。最近、新しくダウンタウンのほうにも教室ができた。

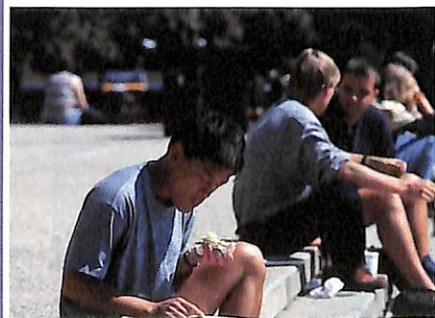
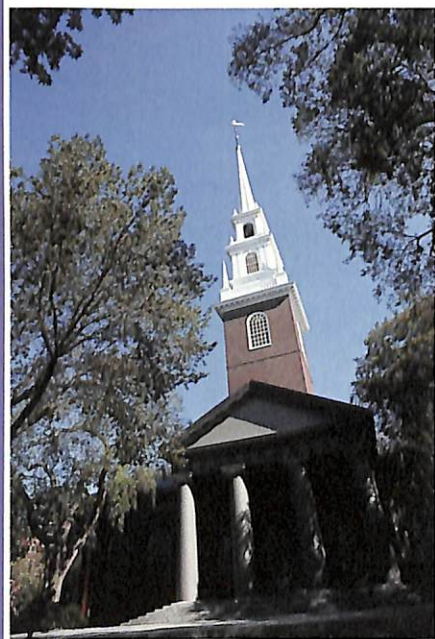


One day トリップ [ボストン大学めぐり] Back to School !!

ボストンにはとにかく大学がたくさんある。大学と言いつても、ユニバーシティと呼ばれる総合大学、カレッジと呼ばれる単科大学、スクールという専門色の強いところとスタイルもさまざま。大きな大学は、誰でも自由に出入りができるので、学生気分に戻って、大学を散策してみよう。

ハーバード大学 Harvard University

ボストン市とチャールズ川をはさんで対岸にあるケンブリッジ市にある一番大きく、そして歴史のあるハーバード大学。1636年に創立されたこの大学はとにかくエリート。今のアメリカのトップを担う人が多く卒業した大学でもある。大学構内には誰でも入れるので、学生気分で散策するには最適。深い緑の中に建つキャンパスには憧れてしまう。

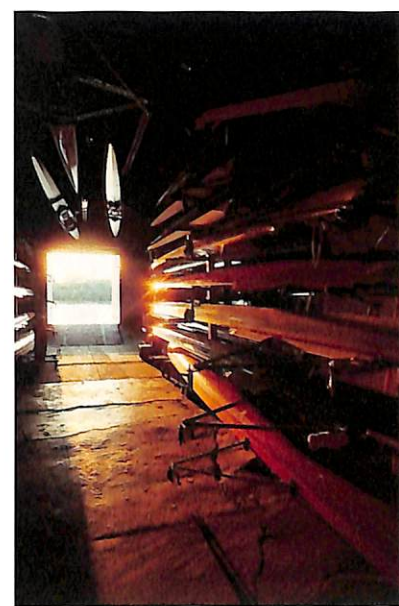


tomorrow
my favorite journey
No. 9



町を歩いていると、近代的なビルの中から古い教会が見えてくる。どこにでもあるようなストリートの角を曲がると、急にそこから昔ながらのレンガ造りのアパートメントが続いている。ニューイングランド地方、最大の都市といわれるボストンは、新しいものと古いものが違和感なく一緒に並んでいる、そんな町である。人口も多く、しかも60を超える大学のあるこの町は、アメリカの中でも平均年齢が25歳とひじょうに若い。けれどなぜだろう。そういうイメージがどうもしっくりこない。町のあちこちで本屋を見かけると、学生の町なのだなという実感がわく。けれど、ボストンはどこなところだった?と聞かれたら迷わず、とても落ち着いた静かな都市、と答えるだろう。それはボストン港とチャールズ川と

いう豊かな水に囲まれているからだろうか。それともいくつかの立派な美術館や、世界的にも有名な交響楽団を持つていたりするからだろうか。ボストン美術館の近くにあるイザベラ・ガードナー美術館に行つたとき、その印象はさらに強くなった。外側の建物は決して美しいものではない。しかし中に入ったとたん、目の前に全く違う世界が広がった。吹き抜けになつて、美しい中庭。それを囲むようにひっそりと並ぶコレクション。町中にあるのに、そこだけはいつの時代からか時間が止まってしまったかのようだった。ボストンの町は浮足立ったところがない。それは、近代アメリカの発展とヨーロッパから人々とともに渡ってきた歴史がうまく溶け合っている場所だから、なのではないだろうか。



水に囲まれた、
イギリスの面影の残る都市、ボストン。

ホット・ドッグ

熱い犬

あのソーセイジをパンに挟んだHot・dogs (ホット・ドッグ) が、アメリカで食べられるようになったのは、偶然からだった。ドイツから移民としてやってきた人たちがピクニックに出かけ、故郷のなつかしい焼いたソーセイジを食べようとしたのだが、とにかく熱くてたまらない。皿も忘れてし、ソーセイジを包む紙もない。そこで近くにあったパンに挟んでソーセイジだけを食べようとした。だが、腹はペコペコ。そのまま挟んだパンと一緒に食べたのがはじまりではないかといわれている。そんなパンに挟んだソーセイジが売られるようになったのは、ニューヨークで行われたボロの試合の時から。いやその当時、ニュージャージー州のコニーアイランドという海岸で売りだしたのだ、とさまざまだが、このホット・ドッグがアメリカ中に広まったのはシカゴの世界博覧会の時だ。これがアメリカ中に広まり、同時に世界中でそのホット・ドッグが有名な食べ物になった。しかしどうしてホット・ドッグというのだろう。看板にこんな絵が描かれているのをみたことがある。汗を飛びちらしたダックスフントのような胴の長い犬が、パンに挟まれている。文字通り、熱い犬というワケだ。だが、なぜ熱い犬というネーミングになったのだろう。何かドイツ語の音合わせからきたのだろうか。謎はつきない。

ぼくはアメリカへ行くと、ハンバーガーよりもホット・ドッグをよく食べる。ロスに屋根の部分のホット・ドッグの形をした屋台のような小さな店があった。そのホット・ドッグがうまかった。屋になるとその小屋の後ろにテーブルと椅子が並び、そこで食べるのだ。そしてドジャースタンで食べたホット・ドッグもうまかった。ちょっと変わったのでは今回つくったチリ・ドッグ。ぼくがこれをはじめて食べたのは十数年前、ヒューストンのアストロドーム球場でだった。これはヒリヒリするくらい辛いチリ・ソースをポタポタ落としながら食べた。その当時、日本ではまだなかった屋根付きの球場をみた驚きよりも印象が強い。それからぼくはチリとチリ・ドッグに凝っている。もう一つドイツ系だと思われるザワークラウトを挟んだホット・ドッグ。これもうまい。アメリカでホット・ドッグを食べているとき、よりアメリカの気分がするのぼくだけだろうか。

西川 治 旅する 胃袋 No.9

にしかわおさむ 写真家・文筆家
1940年生まれ 世界数十か国を旅して遊びと称し、独特のダイナミックな料理人としても評判が高い 著書多数

文●雪真●料理●西川治



●チリ・ドッグ

1. 厚手の鍋にオリーブオイル(大さじ2)を注ぎ、クミンシード(小さじ1)を炒め、香りがしてきたらニンニク(みじん切り、2片)玉葱(みじん切り、1個)を加え、じっくり炒める。
2. 1に挽肉(牛挽肉500gと豚挽肉200g)を入れ、バラバラになるまで炒める。そこに小麦粉(大さじ1)を加えてさらに炒める。
3. 2にこしょう(小さじ1)、赤とうがらし(粉末、大さじ2)、パプリカ(大さじ1)、オレガノ(小さじ1/3)、赤ワイン(200cc)、トマトの水煮缶(1缶)、スープストック(または水、200cc)を入れ、煮る。
4. 3の途中で塩と味をととのえ、ドロリとするまで煮詰める。
5. ホット・ドッグ用のパンに切れ目を入れ、チリ(大さじ2)を入れ、焼いたソーセイジをそのうえにのせ、ケチャップ、好みでマスタードをぬる。

●ザワークラウト・ドッグ

1. 鍋にザワークラウト(500g)とジュニベリー(4粒)、クミン(小さじ1/3)を加え、8分ほど弱火で煮る。
2. ホット・ドッグ用のパンに切れ目を入れ、熱したザワークラウトを挟み、そのうえに焼いたソーセイジをのせ、ケチャップ、好みでマスタードをぬる。

ニューイングランド ショッピング・ガイド

ニューイングランド地方はアメリカの人たちが大好きな果実、クランベリーの名産地。ここではそのクランベリーを使って作られたグッズとボストンの大学のコープで見つけたかわいいグッズを紹介しよう。

※\$1.00=¥100

1. プリマスでとれた果実で作ったハーブティー。
左：クランベリー \$4.95
右：ブルーベリー \$4.95
2. クランベリーの入ったブレッド・ミックス(パンのもと) \$5.00
3. ニューイングランド地方の料理を紹介したイラストのかわいい本 \$6.95
4. クランベリー・ハニー(はちみつ) \$9.90
5. ノースイースタン大学のファイル 各\$0.69
6. 大学のTシャツ
ハーバード大ボート部 \$18.00
ハーバード大ジム \$14.00
ノースイースタン大 \$15.98
MIT \$13.00
帽子 \$12.00
7. ハーバード大学の文具
えんぴつ \$2.19
ノート(大)各\$2.00
ノート(小) \$5.95
レターセット \$7.75



アメリカの正統を じっくりと味わう旅

『アメリカ東部
ニューイングランドの休日
10日間』
主催/ JTBワールド

東部の街々をゆったり巡る人気のコースです。ジョージ・ワシントンの私邸マウントバーノン、バージニア州の美しい自然、印象派絵画が多く収蔵されているボストン美術館、風光明媚な観光地ケープコッド、有名な避暑地ニューポート、そしてワシントンやニューヨークの市内観光など、ご満足いただける内容となっております。経験豊富な添乗員が同行しますので、なにかと安心なツアーです。
出発日：1/16、1/23、2/6、2/20、3/13、3/20、3/27
旅行代金：561,000円～574,000円
※このコースは20名様限定とさせていただきます(最少催行人員10名)

○左記ツアーのほかにたくさんのツアーをご用意しております。日程、料金、出発日など詳しくは下記までお問い合わせください。また、本誌掲載込みハガキでもパンフレット(無料)のご請求ができますのでご利用ください。
●お問い合わせ先
〒101 東京都千代田区神田駿河台4-3 新お茶の水ビル18F
運輸大臣登録一般旅行代理店第3893号
株式会社ライフ トラベルショップお茶の水
TEL: 03-3233-9119